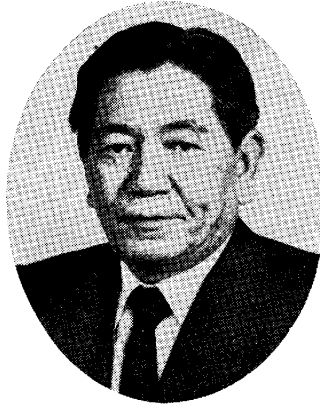
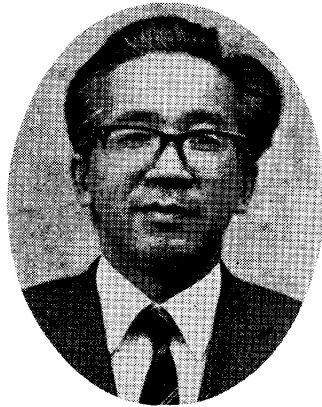


日 本 鉄 鋼 協 会 役 員  
会 長

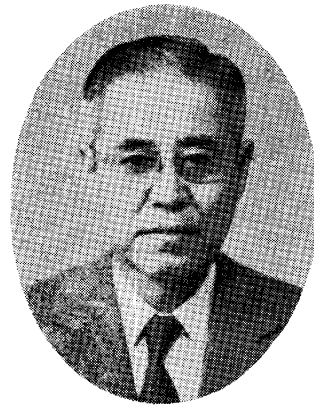


石 原 重 利  
新日本製鉄(株)副社長

副 会 長

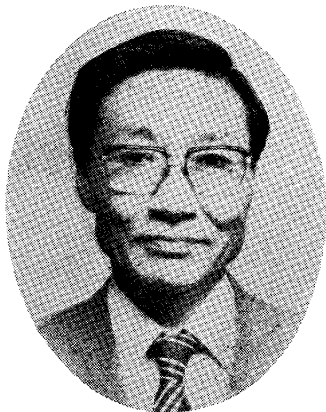


川 合 保 治  
(編集担当兼務)  
九州大学名誉教授

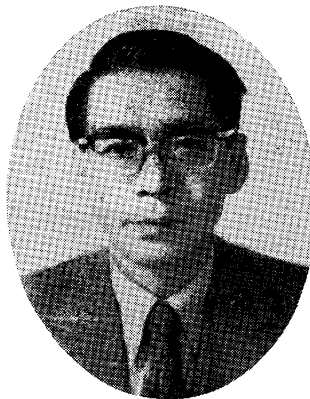


白 松 爾 郎  
東伸製鋼(株)副社長

理 事



木 下 亨  
専務理事



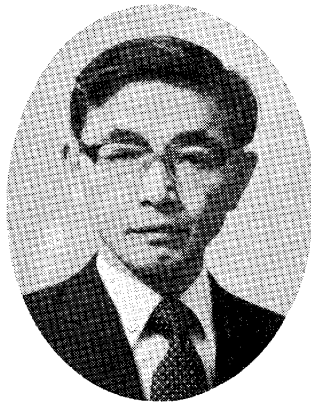
三 井 太 倍  
常務理事



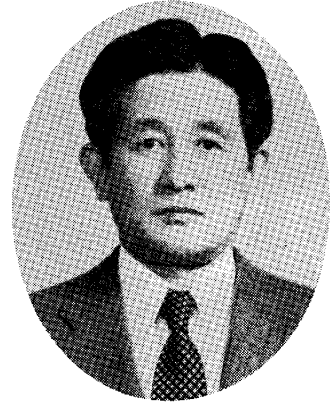
浅 野 鋼 一  
(編集担当)  
山陽特殊製鋼(株)常務取締役



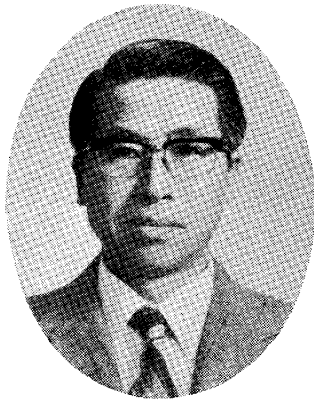
飯島 健一  
(会計担当)  
港湾近代化促進協議会  
常務理事



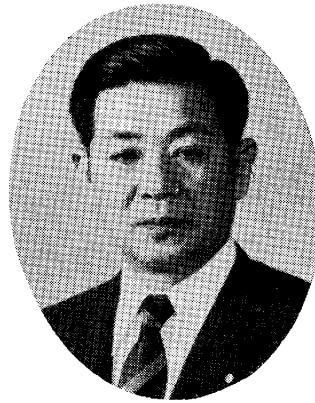
一瀬 英爾  
(編集担当)  
京都大学教授



大澤 秀雄  
(庶務担当)  
大同特殊鋼(株)専務取締役



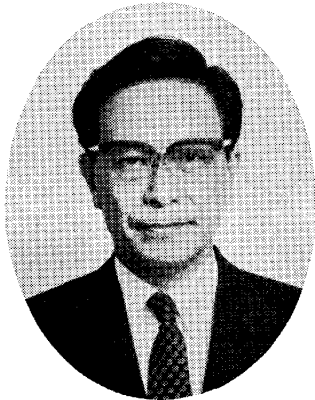
大谷 正康  
(編集担当)  
東北大学教授



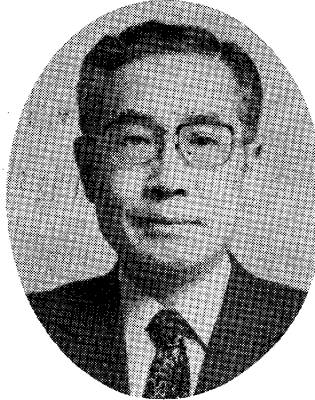
大橋 延夫  
(企画・編集担当)  
川崎製鉄(株)取締役



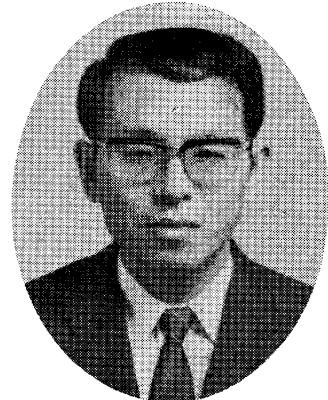
岡 雄彦  
(会計担当)  
東洋鋼鋳(株)常務取締役



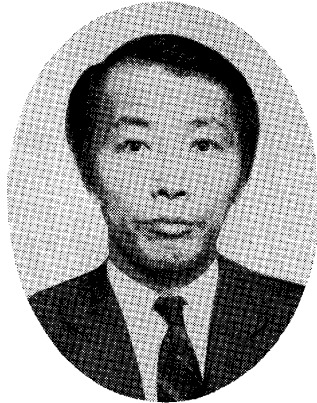
小瀧 昌治  
(会計担当)  
日本鋼管(株)取締役



小野寺 真作  
(庶務担当)  
(株)日本製鋼所理事



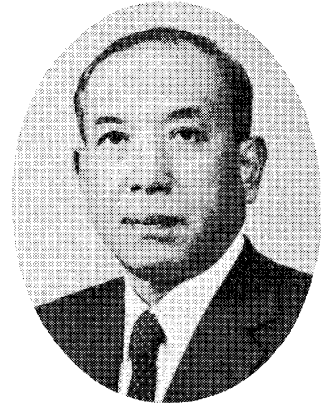
鍵本 潔  
(庶務担当)  
科学技術庁宇宙開発課長



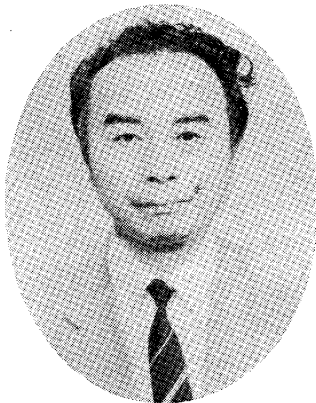
加藤 健三  
(研究担当)  
大阪大学教授



草川 隆次  
(会計担当)  
早稲田大学教授



栗田 満信  
(企画担当)  
住友金属工業(株)専務取締役



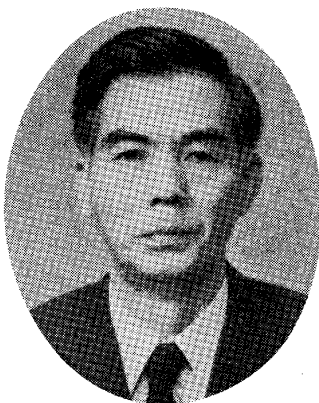
後藤 和弘  
(研究担当)  
東京工業大学教授



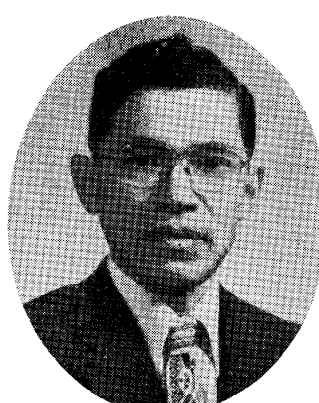
坂尾 弘  
(編集担当)  
名古屋大学教授



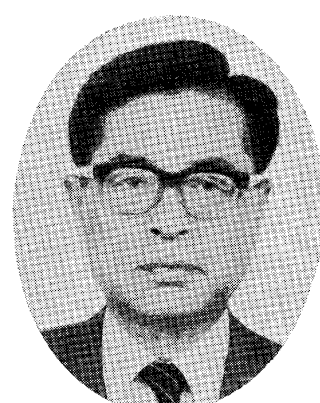
堂山 昌男  
(研究担当)  
東京大学教授



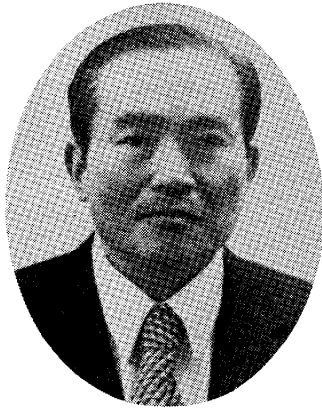
永田 泰郎  
(企画担当)  
(株)中山製鋼所常務取締役



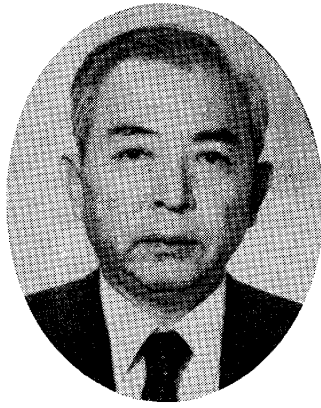
西沢 泰二  
(研究担当)  
東北大学教授



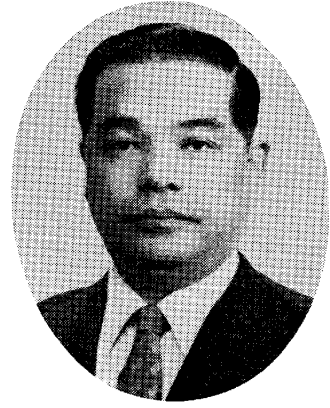
原田 利夫  
(庶務担当)  
新日本製鉄(株)常務取締役



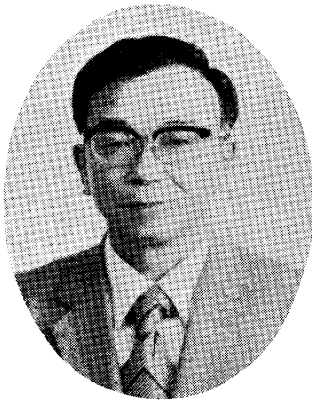
平野 坦  
 (研究担当)  
 (株)神戸製鋼所取締役



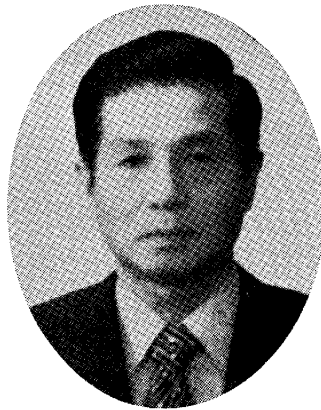
前田 正恭  
 (庶務担当)  
 日新製鋼(株)専務取締役



増子 昇  
 (企画・研究担当)  
 東京大学教授



松原 嘉一  
 (研究担当)  
 北海道大学教授



宮川 大海  
 (編集担当)  
 東京都立大学教授



横井 信  
 (研究担当)  
 金属材料技術研究所  
 材料強さ研究部長

監 事



水野 實  
 (株)吾孺製鋼所専務取締役



濤崎 忍  
 川崎製鉄(株)専務取締役

## 新 名 誉 会 員



科学技術庁金属材料技術研究所客員  
(財)長岡技術科学大学技術開発教育研究振興会理事長  
橋 本 宇 一 殿

氏は1922年東北帝国大学理学部を中退、1923年東京高等工芸学校助教授に就任、同校教授を経て1945年多賀工業専門学校校長、1949年東京都工業奨励館館長を歴任、1956年から12年間は科学技術庁金属材料技術研究所所長として在任した。この間1937年には東北帝国大学より理学博士号を取得、1926年から3年間は、ドイツ帝国カイザー・ウィルヘルム鉄鋼研究所（現在ドイツ連邦共和国、マックスプランク鉄鋼研究所）においてコバルト合金の研究に従事した。その後1972年から1978年まで工学院大学理事長を務め、1984年には財団法人長岡技術科学大学技術開発教育研究振興会理事長に就任して現在に至っている。

氏の研究分野は金属学基礎、金属材料の欠陥、溶接技術等極めて広きにわたるが、とりわけカイザー・ウィルヘルム鉄鋼研究所においてなされたコバルトとその二元合金の状態図に関する研究の学問的功績は世界的な評価を受け、その成果はハンセンの名著「二元合金状態図」にことごとく収録されており、この分野の進歩に多大な貢献をしている。氏のこのような功績が高く評価され、フランス金属学会からは1972年に大賞を、またドイツ金属学会からは1978年にハイン記念賞を受賞している。

氏は研究のみに留まらず教育者、研究指導者としても極めて顕著な功績を挙げた。永年にわたり多くの師弟の指導と育成に努力し、今日氏を師と仰ぐ多数の有能な人材が各方面において大きな業績を挙げている。また指導

的な立場で我が国の多くの学協会の発展に尽力した。氏のこの方面での功績も高く評価され、1965年には日本鉄鋼協会より製鉄功労賞を受賞、1968年には勲二等旭日重光章をまた1977年には銀盃一組を受けている。

氏はさらに海外との学術交流にも力を注ぎ、我が国の科学技術の発展とその評価の高揚に努力した。ことにドイツ連邦共和国との交流については、カイザー・ウィルヘルム鉄鋼研究所における共同研究者並びにその他の多くの知己との交友関係を深め、両国間の金属及び鉄鋼の分野における交流を活発に行ってきた。この間1960年及び1967年にはノルトライン・ヴェストファーレン州科学アカデミーにおいて、また1965年にはマックスプランク金属研究所において特別講演を行った。また、マックスプランク研究所の歴代所長はじめ多くの著名な研究者を招へいすると共に多数の我が国の研究者を送るなど、両国の交流を盛んにした。またフランスについてもフランス鉄鋼研究所、鉱山冶金大学等との交流につとめ、氏自身たびたび研究状況の視察を行うと共に、多くの研究者の交流に貢献している。氏のこれらの功績に対しては1974年ドイツ連邦共和国より功労勲章大功労十字章を、またフランスからは1978年にレジオンドヌール勲章を受けている。

氏は現在も自ら学研の徒として研究に務めるかたわら、学界及び産業界の発展に力を惜しまず、我が国の科学技術発展に尽くして来た功績は高く評価される。

## 新 名 誉 会 員



東京大学名誉教授，日本鋼管(株)顧問  
松 下 幸 雄 殿

氏は昭和 17 年 9 月東京帝国大学工学部冶金学科を卒業，直ちに同大学第二工学部冶金学科講師に任ぜられ，併せて海軍短期現役に服務，昭和 20 年 9 月には同大学に復帰，昭和 22 年 1 月助教授に昇任，組織改正により昭和 24 年 5 月同大学生産技術研究所第 4 部勤務，昭和 32 年 3 月工学博士の学位を取得，昭和 34 年 1 月同大学工学部冶金学科勤務，昭和 35 年 5 月教授に昇任して鉄冶金学講座を担当，昭和 55 年 4 月停年退職，東京大学名誉教授の称号を授けられるとともに日本鋼管株式会社顧問として現在に至っている。

氏は海軍航空技術廠支廠においては，平炉および電弧炉の操業と研究に従事，第二工学部ついで生産技術研究所においては，熔融スラグの物性と反応性，電気化学的手法によるスラグ構成成分の熱力学的性質に関する考察などの研究に従事し，ついで工学部においては固体電解質を用いる酸素濃淡電池により鉄鋼製錬にかかわる各種酸化物，炭化物の標準生成自由エネルギー，溶鉄の酸素分圧などの測定水素・アルゴン・プラズマによる高クロム鋼の精錬，転炉スラグの脱りんを中心とするスラグの有効利用など鉄鋼製錬におけるスラグと製錬反応に関する基礎と応用両面に貢献した。

また，本会事業の推進に当って氏は昭和 36 年 4 月より昭和 59 年 4 月までの間本会理事を 6 期務め，特に昭和 45 年 4 月より 2 年間および昭和 49 年 4 月より 2 年

間編集委員長，昭和 53 年 4 月より 2 年間副会長，昭和 57 年 4 月より 2 年間会長を務めた。この間，共同研究会では昭和 33 年 4 月より昭和 43 年 9 月まで新技術開発部会直接還元法分科会主査，昭和 37 年 5 月より昭和 40 年 4 月までラテライト 研究部会長，昭和 43 年 9 月より昭和 47 年 1 月まで原子力部会第 2 小委員長などを歴任，昭和 52 年 3 月より昭和 57 年 2 月まで特定基礎研究会スラグの有効利用に関する基礎研究部会長を務めるなど産学協力研究を推進したほか，たたら製鉄法還元計画委員会委員長として昭和 44 年の還元実験を行った。

また氏は，第 5 回（昭和 50 年），第 6 回（昭和 52 年）の日本・ソ連製鋼物理化学シンポジウム，第 1 回（昭和 52 年）日本・チェコスロバキヤシンポジウム，第 1 回（昭和 56 年），第 2 回（昭和 58 年）日本・中国鉄鋼学会会議の本会責任者を務めるなど本会国際交流事業の推進に寄与した。

これら卓越した業績により，氏は本会から昭和 28, 41, 45 年の 3 回にわたり俵論文賞，昭和 40 年に協会事業功労賞，昭和 55 年に西山賞をそれぞれ授与されている。

以上の他，昭和 55 年 11 月北京鋼鉄学院名誉教授，昭和 57 年 5 月アメリカ鉄鋼協会名誉会員，昭和 45 年 4 月より現在まで 15 年間は日本学術振興会製鋼第 19 委員会委員長として斯界に貢献している。

## 新 名 誉 会 員



Max-Planck-Institut 鉄鋼研究所所長

Prof. Dr. rer. nat. Hans-Jürgen Engell

氏は1950年にRostock大学化学科を卒業、1952年にGreifswald大学で理学博士の学位を取得、その後1963年までMPIに勤務して腐食研究、スラグ研究に従事した。1963年Clausthal工科大学に理論冶金学の教授として迎えられ、1965年にはStuttgart工科大学に転じて物理冶金学の教授を勤める傍ら、Max-Planck-Institut für Metallforschung 所長を兼ねて1970年まで在任した。1971年Max-Planck-Institut für Eisenforschung (MPI) 所長に就任するとともに、Clausthal大学の名誉教授となり、また1976年にはDüsseldorf大学の名誉教授となった。MPI鉄鋼ならびに金属の両研究所、およびClausthalならびにStuttgarの両工科大学あるいは国際会議において、氏の卓越した識見と鋭い洞察による示唆、助言あるいは指導を受けた邦人はこれまでにも数多い。

氏の研究分野は腐食をはじめ理論冶金、化学冶金、物理冶金の広範に亘っている。科学研究の論文は140編にも及んでいるが、なかんずくProf. von. Bogdandyとの共著書“Die Reduktion der Eisenerz (1966)”は世界的に有名で、この英語版(1970年)日本語版(1971

年)も引続いて出版された。氏はまた専門誌“Werkstoffe und Korrosion”および“Corrosion Science”の編集を長年手掛け、腐食研究の推進に格段の尽力を継続して来た。

氏のこのような業績が高く評価されて、ドイツ金属学会からは、1963年にMasing賞を、1982年にはHeyn記念賞を受け、また1981年に欧州腐食協会からLeo-Cavallo-Medailleを1982年に腐食科学技術協会(ロンドン)からU. R. Evans Awardをそれぞれ受賞している。更に1982年にはドイツ連邦共和国からBundesverdienstkreuz 1. Klasse(連邦功労十字章勲一等)の栄誉を受けている。

勿論氏の活動は専門の研究に留まるものではなく、科学と技術の全般に亘っている。それを最もよく表しているのが、1979年に就任したドイツ連邦科学会議委員であり、1982年以来その議長の職にある。その他、Nordrhein-Westfalen州科学アカデミー会員、原子力エネルギーセンター(Karlsruhe)科学会員、ドイツ鉄鋼協会理事、ドイツ化学機器協会理事、Volkswagenwerk基金理事など、多彩にその社会的重責を果たしている。

## 新 名 誉 会 員



United States Steel Corp. 副社長  
Dr. Harold William Paxton

氏は 1947 年イギリス Manchester 大学冶金科を卒業, 1952 年イギリス Birmingham 大学より工学博士号を取得, 翌年アメリカ Carnegie Institute of Technology (現在の Carnegie-Melon University) 冶金工学科の助教授に就任, 1966 年から 5 年間は同大学 Metallurgy and Material Science 学部長および同大学 Metals Research Laboratory 所長として在任した. この間 1962 年から 2 年間はイギリス Imperial College, 1970 年には MIT の客員教授を歴任した. その後 1971 年から 1973 年までアメリカ National Science Foundation の Material Research 部門の首席 director を務め, 1974 年 United States Steel Corporation の研究担当副社長に就任し現在に至っている.

氏はその経歴において終始, 研究開発業務に従事しているが, とりわけその前半においては金属および合金の物理的, 機械的性質についての学問的功績で世界的な評価をうけている. その科学研究の論文は 60 編以上に及んでおり, なかんずく Dr. E. C. Bain との共著による "Alloying Elements in Steel (1966)" は有名で, この分野における研究の発展に多大な貢献をみている. またその後半においては国家機関・企業において研究開発の重要ポストを歴任し優れた学識, 洞察力, 指導力をもって鉄鋼・材料技術の進歩, 発展に多大な成果を収めてき

た.

氏の活動は学界と産業界に広範囲に亘っていて American Association for the Advancement of Science および National Academy of Engineering の会員に選出されている他, American Iron and Steel Institute (AISI) の General Research Committee 委員長, 全米大手企業の研究担当役員が研究開発行政などを討議する Industrial Research Institute の Federal Science and Technology 委員会委員を歴任, American Society for Metals (ASM), American Institute of Mining, Metallurgical and Petroleum Engineers (AIME) の Fellow Member であり, AIME での活動では 1982 年会長の任にあたった.

氏はこれらの功績により ASM の E. D. Campbell (1978), Z. Jeffries (1983) 各記念講演を行った他, BCRA Carbonization Science, Australasian Institute of Mining and Metallurgy で招待記念講演を行っている. また 1983 年には ASM の Gold Medal for the Advancement of Research を授与されている.

これまでに日本の多くの研究者, 技術者が氏に師事し卓越した識見と豊富な経験に基づいた教導, 示唆, 助言に大いなる啓発をうけ研究開発活動に裨益している.



## 新 名 誉 会 員



北京鋼鉄学院教授  
中国科学院技術科学部学部委員  
魏 寿 昆 殿

氏は 1929 年中国天津市北洋 (Beiyang) 大学を卒業、1931 年より当時のドイツにおいて Technische Hochschule Berlin 及び Technische Hochschule Dresden に学び、1935 年化学博士の学位を取得した。引き続き Technische Hochschule Aachen の鉄鋼冶金研究所において Post-doctoral study に従事した。

1936 年帰国後は母校北洋 (Beiyang) 大学にて冶金及び化学の教授として迎えられた。その後西安市西北連合大学、西昌、貴陽の各大学教授を歴任され、1942 年から重慶鎂山冶金研究局の Research Fellow として鉄鋼研究部門の長に任ぜられた。次いで同局の副理事に任ぜられ併せて重慶大学冶金科教授の職を兼務した。

1946 年から再び母校北洋大学冶金学部長として迎えられ、1949 年から工学部長に任ぜられ、1951 年から天津大学 (元北洋大学) の副学長を拝命した。

次いで 1952 年から北京鋼鉄学院の冶金学科教授として迎えられ、1979 年から 1983 年までは副院長を務め現在に到った。

氏はその間、鉄鋼関係の論文も数多く発表されており、その一例をあげれば、1939 年に中国科学協会の

Science 誌に “On the Design of Blast Furnace Contour” を、又 1944 年には同会誌 “The Decalcification of Szechuan Dolomite (in English)” を発表し、又 1945 年には鉄鋼研究の特別報告 (13 MMR) として “Operation and Design of Baby Blast Furnace” を発表した。

又 1948 年には Science 誌に “Twenty-years' Review on the Chinese-Metallurgical Research” の長期に亘る回顧を発表した。

著書としても 1954 年に “Design of Open Hearth Furnace”, 1958 年に “Construction of Open Hearth Furnace and Its Plant Layout” 等の出版が見られる。

特に氏が傾注されている分野は冶金学的反応の熱力学と Kinetics 及び鉄鋼の化学冶金であり、その面における著書と多くの研究論文が見られる。又当協会と中国金属学会との協定に基づく日本・中国鉄鋼学術会議にも論文の提出があり、特に第 2 回の東京会議には団長として来日され日中相互の学術的交流に貢献される所が大であった。